

ま え が き

I

本誌の「アフリカ特集号」もこれで第4回目の刊行になるが、われわれのアフリカ研究もどうやらこのあたりでようやく一つの転機にさしかかってきたような気がする。つまり、文字通り暗夜に手さぐりで研究を始めたわれわれが、対象地域の多様な実態に触れ、その成果としての理論を方法論に収斂させる過程で、日本人としての自分の中にアフリカ研究を定形化するために、事象の精力的な抽象化と厳粛な行動への参加という形で、従来無意識的に前提されていた研究者自身の枠組としての理論があらためて問い直されてきたということであろう。もとより距離を隔てながら本来同一と見做さるべき問題性が日本の政治的ミリューの中で故意におおい隠され、それがしばしば研究者個人レベルでの精神的荒廃を余儀なくさせている状況の下では、そのことのもつ意味はきわめて深刻である。いずれにせよ地域研究者としては、発展途上国の現実に照らして自己の方法論を拡大・展開させる際に、いつでも枠組としての理論にたちかえる復原力を身につけねばならぬということになる。

しかし、発展途上国の研究は、日本の国内問題の研究とは異なり、多くの場合、方法論に反映される成果としての理論にほとんど不整合とも思える多元的論拠が包含されるものであるから、そこでは研究という営為自体がわれわれの日常性の中でとかく非対人的なものとなり、いわば「供託」的性格を帯びるに至る。ことにその傾向は、日本が国家としてコミットすることが少ない発展途上国を研究対象とするときにいっそう顕著となるように思われる。たとえば、日本と比較的馴染の薄いアフリカ諸国などの場合、研究者は体制との不調整を未解決のままにしながら、ある意味では必然的に、ある意味では偶発的に研究を「供託」することができる。もとより「供託」は、過去からの当事者間の対抗関係を残しながら、現在の営為を第三者に納得させ、しかるのちその関係のあり方自体を本質的に再検討せしめるという仕方であり、一挙に未来をも克服しようとする手続きであり、そのかぎりにおいてそれは決して単線的に歴史的なものではなく、相互に緊張関係にある個々の存在を水平的に容認するものである。その意味からしても、われわれのアフリカ研究は、枠組としての理論(規範)に立脚した単一の告白よりも、成果としての理論(構造)に胚胎する多様な論拠を追求するものでありたいと思う。かかる姿勢を貫くことは、日本の物質的繁栄と外見上の平和の中で研究者に精神的荒廃をもたらすさまざまな陥穽からわれわれを免からしめるためにもことのほか有効なのではあるまいか。

II

安藤論文（「アルジェリア鉱業政策の特色」）は、アフリカ諸国の天然資源に対する主権設定を法的側面から終始追求してきた執筆者が、特にアルジェリアについて鉱山国有化の歩みと動機、経済政策的評価、アルジェリア社会主義における意義などを明らかにしようとしたもので、その要旨は、アルジェリアにおける国家の鉱業支配は自主管理された農業の場合とは異なってより直接的であり、外国会社により開発されている炭化水素部門を除いて、鉱業の国有化は、脱植民地化ばかりでなく、社会主義化に大きく役立つべきものとされているというにある。

細見論文（「アサンテ連合形成過程の研究」）は、かねてよりガーナ経済史における奴隷貿易の位置づけに腐心してきた執筆者が、その問題関心をさらにいっそう深めて、18世紀初めから19世紀末までの約2世紀にわたり西アフリカ海岸地方に形成されたアサンテ帝国の存在に注目し、奴隷狩り戦争の混乱の中で互いに敵対・抗争していた諸部族がいかにして強固な軍事的協力体制の下に結束しえたかをあとづけようとしたもので、ここでは特にアカン語族の氏族外婚制による血縁関係の成立に関連づけて立論されている。

林論文（「キクユの土地保有」）は、2カ年のケニア滞在中その農業開発と社会・経済構造に関心をもち続けてきた執筆者が、当面の研究対象として、農業改革の一つである土地調整および登記が実施されたアフリカ人地域における改革前の土地保有の実態を明らかにしながら、アフリカ人私有地創設の意義を検討しようとしたもので、キクユランドにはバガンダにおけるような中央集権的な王による土地保有はなく、いわゆる部族共同体的土地保有なるものは存在しないこと、また、アフリカ人地域の土地改革の本質は、ムバリ成員の土地不足への不満を土地私有化による生産力向上にすりかえることにあったことが結論的に指摘されている。

星論文（「ザンビアにおける『部族主義』と土地保有」）は、アフリカにおける土地保有を民族形成の問題にからめて考えてきた執筆者が、ザンビアの権力構造における正統性を明らかにするために、ロジ、ペンバおよびトンガの土地保有形態を比較検討しようとしたもので、けっきょくロジの土地保有階梯とトンガの未利用地個人保有という二つの指標をとり出し、伝統的社会と外部世界との接触過程において、組織的求心力の強かった種族集団がかえって新しい社会変動への適応力を失い、政治勢力として分裂・孤立化してゆくという逆転の論理を提示している。

なおシンポジウム（「日本におけるアフリカ研究」）は、問題提起者（原口）の批判的提言をめぐって所内アフリカ研究者が討論したものであり、対象化された問題の大きさの割には具体的な素材を生かした論議の提示とその反応に突込みが足らぬ憾みもあるが、この種の試みとしては最初のものなのであえて収録した。

（星 昭）